
ビギニングファンタジー

ですぺあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビギニングファンタジー

【Nコード】

N86670

【作者名】

ですぺあ

【あらすじ】

ちよつと人を斬るのが大好きなツンデレ少女・辛かのとは天然男の娘・千秋と一緒に目が覚めたら異世界にいた。これはそんなありきたりな切っ掛けから始める、神話を叩き壊す彼女らの冒険譚。

ああ、斬りたい刻みたい。

泡沫の独白、あるいは導入（前書き）

最近スランプなので別ネームで新しく書いてみる。他にも試験的に色々やってるのですが、まあ生暖かく見守っていただけると。

泡沫の独白、あるいは導入

沖おき辛かのと。

いきなりだけどあたしは自分を表すこの名前が嫌いだ。言いにくいし字面が不吉、というよりまず自分の娘に『辛い』なんて字を当てる親の考えが理解出来ない。あれか。『辛い人生を送りますように』とかそんな願いくのろいくでも掛けたのか。さらに言えば、『かのと』CANNOT<不可能>』とこじつけまで出来る。

心当たりは正直無い。というよりもあたしがよちよち歩きの頃に死んだ有象無象の気持ちなんて理解出来る訳がない。

けどちよつと前そんな事を半ば愚痴みたいに語ったら凄い呼び方をされる様になってしまった。今も進行形で。

誰に、どつ、って？

「のーちゃんっ！」

つ。
ハイティーンの女相手に幼稚園児みたいな渾名で呼びかけるそい

無愛想なあたしにほわほわと笑顔で相對するそいつ。

直そうと思ってる訳じゃないけど多分一生直らないつり上がり気味のあたしの眼にきらきらした柔らかい眼差しを送り込んでくるそいつ。

いくつもヘアピンを使わないと纏まらないあたしの金髪に嫌味を言ってるのかってくらい細くふわふわした赤茶っ毛で耳や首の後ろを隠すそいつ。

我ながら微妙に発育の良い160超えの目線が見下ろす、童顔に見あつたちんまいそいつ。

ムカつくのは。あたしよりよっぽど可愛らしいという形容詞が似合うそいつが、生物学上オスだって事だ。

お気に入りにはあたしが冗談のつもりであげた飾り付きのリボン。好きな食べ物は見てるだけで口が甘くなりそうなバナナショートケーキ。

絶対生まれた性別を間違えてるそいつの名前は『（こ）甲（う） 千秋』。
……名前まで女っばい。

ムカつくけど。あたしが世界で唯一親しいと言える人間で、

あたしの語る物語の、主人公。

目覚める。(前書き)

シンデレラって難しい。

目覚める。

目が覚める。眼前には女の子みみたいな野郎の、夢に出てた通りのほえほえした笑顔が覗き込んできてる。

「あ、のーちゃん起きた？」

近い。

「ていつ！」

「あう！？」

蹴り飛ばしてからやけに手触りのいい布団を跳ねのけ起きると辺りを見回す。ぼーっとする視界がだんだん慣れて来ると気分がやさぐれていくのが分かった。

足が埋る模様付きの絨毯に棺桶みたいな天蓋付きのベッド、落としたら人を潰せそうなキラキラしたシャンデリアに蠟の滴る壁の燭台は多分純金。欠けた月が窓枠の宝飾に反射して虹色に光ってた。

……………何これ。起きたら全く知らない場所にいました、と。しかも一般庶民以下の感覚のあたしからすれば一生縁が無さそうな部屋だ。

当然そんな所で起きる様な覚えもあたしにはなかった。寝る前の記憶も、

(……………あれ?)

最後に覚えてるのは、真っ昼間学校の教室で千秋に弁当をたかつてた情景。今着ている服も、あたしも千秋も学校の制服。

それがなんで今が夜でこんな所で寝てるのか全く覚えてない。例えあたしが突然倒れて搬送されたにしても王侯貴族みたいな部屋に入れる意味がないし、もうちょっと千秋が取り乱していてもいい筈。

(……………千秋、か。)

思えば平然とあたしの寝起きを観察する余裕のあった千秋はあたしよりも状況を理解してるに違いない。そう思えば行動は即実行、床で目を回している千秋を掴み上げた。

「吐け。」

「……………きゅう。」

「ボケるとは一言も言ってないし。ここはどこであたし達がなんでこうしてるのか吐け、っつってんの。」

げしげし。

「あうう……………っ、のーちゃんひどい。」

軽く蹴られたくらいじゃ足んないのか。それじゃ、と思って拳を思い切り振り被ると千秋が慌てて飛び起きぶーたれた。

なので、そのまま拳を振り下ろす。あ、良い音鳴った。

「の〜〜ちゃああ〜〜んっ!?!?ひどいい〜〜!」

「あ…ごめん。」

あたしは何をドツクだけの漫才やってるのか？

泣きべそを掻き始めた千秋を抱き寄せて慰めてあげる。手触りの言い髪の毛を撫でさすると、現金なもので千秋は一瞬で泣き止み上機嫌に胸元にすりすりしてきた。

……どうせ効果音は『すりすり』よ。悪かったな、『ふによん』とか『もにゅもにゅ』じゃなくて。

「えへへ……ひどいことしてもすぐ慰めてくれるのーちゃん。いいにおい、好き〜。」

「……………」

……………。

い、いけない。これじゃ話がいつまで経っても進まない。

「（和んじゃ駄目和んじゃ駄目和んじゃ駄目 ……！）ばっ、へへ変態みたいな事言っていないでさっさと説明して！」

「変態じゃないよお。」

「また殴らりたい？」

「ごめんなさい。うう。」

少し名残惜しそうにあたしの胸から離れると千秋はぱつと表情を切り替え問いに答え、

「あのねのーちゃん、すごいんだよ、ここ実は「異世界です、お客人。」……あう。」

ようとしたらしい。というのは、台詞の一番肝心な所を現れた誰かに横取りされたから。

(しかし、異世界。)

なんて突飛な。

「ひゃうっ!?!」

取り敢えず横の千秋を殴つといた。

王女。

そいつは、まあ一言で言うなら美人だった。それも、美人というカテゴリーに属す事に違和感を感じるような美人。なんか日本語がおかしいけど事実そうなんだから仕方ない。

腰まで真っ直ぐに伸びた銀色の髪がまず眼に届く。本当に軽く柔らかい金属でできているのかってくらい眩い光沢を放ってて、それでいてそこだけに注目させない。こんな特徴的な髪を持つてればただ銀髪女で覚えてしまふところを阻んでるのは、そいつの美貌。彫りの深い西洋系の面なのにとこまでも柔らかい目鼻立ち、けど千秋と違って頼りなさじゃなく慈愛を感じさせる系統の表情だ。視力に異常ないの？ってつつこみたくなる金色の瞳はこちらを微笑ましそうに見てる。

首から下は最早異常なほど。飾りも少なくある程度は動きやすさを追求したようなドレス越しに判る体型は、アレな言い方をすればボン・キュツ・ボンというやつだ。まさか現実にこんな表現を使う日が来るとは思ってもみなかった。手足も細く長く、まるで理想的なモデル体型。

あ、とつても りたい みたい 。

(はいはい、今のところは自重しな。)

込み上げた、慣れてはいても親しんではないない感覚を抑える。話を聞く場面だこは。

「で、あんた誰？」

「申し遅れました。私はルキシア王家第二王女アリスメサイア・ツアル・ルキシア・グランツトレーネ。目覚めになられたようですが、お加減はいかがですか？」

物腰までお上品だった。飾ってる雰囲気でもなく、素で『お加減は』って。王権国家に暮らしてた訳じゃないから目の前の姫がどれだけ偉いのかは知らないけど、イメージしやすい理想的な王女様にぴったり当てはまるのは普通に凄いと思う。別に羨ましくないけど。胸以外は。……胸以外はっ！

「あ、あの？」

「……………いや、大丈夫よ。いい加減話を進める。ほら千秋、いつまで寝転がってるの！」

「ひどい、のーちゃんがやったのに……………」

千秋の手を引っ張り起こす。ブレザーの背中に絨毯の毛が付いたのではたいてやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8667o/>

ビギニングファンタジー

2010年12月10日04時27分発行